大野城市歴史資料展示室　解説シート　考古No.32

須恵器の里 大野城市

大野城市教育委員会

牛頸平田D－1窯跡

床　面

床の断面

大野城市には古墳時代から平安時代にかけての須恵器の窯跡がたくさん見つかっています。特に大野城市の南部にあたる牛頸に数多く造られたので、その一群を牛頸窯跡群とよんでいます。牛頸窯跡群は牛頸だけでなく、上大利や春日市、太宰府市の一部を含む東西４キロ、南北4.6キロの範囲に広がっていて、大阪府にある陶邑窯跡群や愛知県にある猿投山西南麓窯跡群と並んで日本三大窯跡群と呼んでも良いくらい多くの窯が造られました。現在までに約250基の窯が調査されていますが、総数は500基を越えるのではないかと考えられている須恵器の一大生産地でした。

優れた技術

須　恵　器

土　師　器

牛頸窯跡群では６世紀の中頃から、須恵器の生産が始まりました。

山の斜面をくり貫いて造る窯で焼かれた須恵器は、焼く時の窯の中の温度が1100度以上と非常に高温になるため、大変硬くなります。また、高温になった段階で閉じてしまい酸素の供給を断つことから灰色になります。

同じ時代に作られた土師器は、酸素が供給できる野焼きの方法で焼かれました。そのため焼く時の温度は600～800度と低く、焼きあがりも赤い色をしています。

須恵器は水など液体を入れるのに適し、土師器は煮炊きに適しました。

須恵器を作る技術は、朝鮮半島からもたらされました。須恵器を作る人々は須恵器工人と呼ばれ、５世紀初め頃西日本の数箇所にその技術をつたえました。大阪府の陶邑窯跡群が中心的な窯跡群となり、その後工人が６世紀中頃牛頸へも技術を伝えました。

牛頸で見つかる古代の集落のゴミ穴から須恵器の破片が多く見つかっていますし、古墳（お墓）からは須恵器の窯を掘る時に使われた鉄製の鍬先が見つかっています。このことから須恵器の生産に係わった工人が暮らしていたことがわかります。

牛頸の山々では当時の最先端技術を使ってたくさんの須恵器が作られ、平地には工人たちの暮らす家々が立ち並び、丘陵には古墳が造られました。